

溺愛アルファの完璧なる巣作り

リヒト

異国の山の中で死にかけていたところを、ユリウスに拾われたオメガ。五感が弱く、運命の匂いもわからない。

ユリウス

サーリク王国の第三王子。優秀なアルファで、おのれの運命であるリヒトを溺愛している。

アマーリエ

マリウスのつがい。ほがらかな女性オメガ。

マリウス

ユリウスの長兄であり、王太子。豪快なアルファ。

テオバルド

リヒトの付き人。親子二代でユリウスに振り回されている苦労人。

エメール

クラウスのつがい。平民出身の柔和なオメガ。

クラウス

ユリウスの次兄。騎士団の団長を務めるアルファ。

CHARB

やさしくやわらかく僕を呼ぶ声。くつきりとした「リヒト」の音。
それから、あたたかなてのひらの感触。

「リヒト、僕のオメガ」

この世のしあわせをぜんぶぜんぶ集めたかのような、ユーリ様の言葉。

僕の目に触れる光も、耳に届く音も、肌に触れるぬくもりも、馨しい香りも、舌に甘く広がるよろこびも、僕の世界はすべて、ユーリ様がくれたものだ。

この人が居なければ何もなかった。

この人が僕のすべてで……僕の、アルファなんだ……

第一章 邂逅

転がっている『それ』があまりに小さくて汚くて、うわあ、とこの声が漏れた。しかし騎士たるもの、気づいてしまった以上無視するわけにもいかない。

サーリーク王国騎士団第一部隊の末席に名を連ねる駆け出しの騎士、ユリウス・ドリッテ・ミューラーはそっと身を屈めて両腕を差し伸べ、泥まみれの『それ』を地面から引きはがすようにして持ち上げた。

重さはほとんどない。鍛錬で使う錘おぢ一つ分の重さもないかもしれない。

けれど腕に抱き上げた途端に『それ』はなぜか圧倒的な存在感を放ち、ユリウスはまたうわあと思った。今度は声にも出た。

「うわあ……」

なんだこの感覚は。腕がビリビリしている。いや、腕だけでなく全身……特に体の深い部分が、歓喜に打ち震えているのがわかる。

「どうしました？」

不意に背後から声をかけられた。

ユリウスは『それ』から離れたがらない視線を強引に動かして、振り向いた。

「子どもが落ちてた」

「そんな犬猫じゃあるまいし」

ユリウスなりの冗談とでも思ったのか、はは、と笑いを漏らしたロンバードがひよいと手元を覗き込み、「げつ」と呻うなく。

「マジで子どもじゃないすか。どうなってんだよこの国は。……生きてるんですか？」

「死んでるわけじゃないでしょ」

生きているからこうして拾い上げたのだとユリウスは男へ一瞥いちべつを投げ、それからそうと腕の中の『それ』を抱え直した。

泥に汚れた皮膚と襦ほろ袢もんの服。ごわごわに固まっている髪はくすんだ灰色。

一見してゴミのかたまりのようにも見えるその子どもはとても小さく、力加減を間違えば脆もろく壊れてしまいそうに細い。痩せて骨ばった手足がかわいそうなのに、もう二度と離せないのではないかと、うろたへるほど抱き心地が良かった。驚くほどにユリウスの腕に馴染んでいる。

ユリウスは慎重な動作で、子どもの長い前髪をそっと掻き分けた。ろくに洗っていないのだろう。ベタつくのに硬い不潔な手触りの髪に、素手で触れることに抵抗はない。それよりも顔が見たかった。子どもの目は閉じている。瞼まぶたの周囲は赤く爛ただれ、ひよつとすると眼病に侵されているのかもしれない。皮膚も唇も色を失い、カサカサだ。

わずかに開いた唇の間からあえかな呼吸音があることに気づかなければ、死体として埋葬していたかもしれない。

自分は生きている、と小さな体で精一杯の主張をしているその呼吸にも、ゼロゼロとした濁りが

あった。放置すれば数時間後にも死神がこの子を迎えに来るだろうことは、ユリウスにも容易に予想がついた。

「させないよ」

ユリウスは泥と垢の沁みついた『それ』のひたいに、羽のようなキスをする。

「僕が見つけたんだ。もう誰にも渡さない」

微笑が徐々に顔全体に広がってゆく。

見つけた、見つけた、と頭の中で祝福の鐘が鳴っていた。

見つけた。僕の、オメガ。

「……さま、ユリウス様」

リンゴンと鳴る鐘の音に紛れて、ロンバードの声が響いた。

「なんだ」

「なんだじゃないですよ。ほら、聞こえるでしょ。召集の鐘」

むさくるしい男に指摘されて初めて、ユリウスは鐘の音が幻聴でないことに気づいた。

確かに、一定間隔で響く鐘は、集合せよの合図だ。

腕の中の子どもに気を取られていたユリウスは、そこでようやく己の業務を思い出した。

そうだ、野営のため周囲の哨戒しやうかいをしているところだったのだ。

「僕は抜ける」

「バカ言わないでください。新人騎士にそんな自由行動は許されてませんよ」

呆れた様子も隠さずに、ロンバードが眉をひそめた。

背の高い男を見上げ、ユリウスは笑った。

「騎士の仕事以上に重要な仕事ができただよ。この子を世話するという仕事だね」

「ユリウス様」

「兄上の天幕を借りる。交渉してきて」

「どこの世界に団長の天幕を借りる新人が居るんですかつ」

「ここに居る」

唇の端を持ち上げ、ユリウスはくいと顎を動かした。

こうして話している時間をもつたいない。さつさと天幕の使用許可をとってこい。

無言の命令を送ると、ロンバードの顔が盛大に歪んだ。

「上官を顎で使わないでください！」

「上官だと言うなら口の利き方をなんとかしろと僕は何度も言っただけだ。ほら行け。走れ」

「ぐぬう」

葛藤に声を詰まらせたロンバードは、しかし次の瞬間には機敏に走り出していた。

ユリウスは子どもを両手でしっかりと抱きかかえ、振動がいかないうちと、慎重な足運びで男の後を追った。向かう先は兄の天幕だ。

「ユーリ」

兄である王国騎士団団長、クラウス・ツヴァイテ・ミュラーは天幕の中、困り顔でユリウスを迎えた。ものすごく何かを（きつと叱責の言葉だ）言いたそうに唇がもごもごと動いている。

それを無視してユリウスは単刀直入に告げた。

「兄上、今日は天幕をお譲りください」

「ユーリ。待ちなさい、ユーリ」

兄がてのひらをこちらへ向け、それからユリウスと同じ明るい金髪をぐしゃりと掻き回した。
「十七になったから騎士団に入れてくれ、特別扱いはしないでいい、一介の新人として一番下から這い上がる、と豪語していたのは誰だ」

クラウスは父とよく似た少し硬い話し方をする。

普段は落ち着いた声音が、ひとたび戦場となると凛と響き渡り、騎士たちを鼓舞し続けるのだ、とはクラウスと幾度も生死を共にしたロンバードの言葉だ。

現在は周辺諸国とも和平協定を結び、大きな戦もない。そんな平穏な世にあつてユリウスの騎士としての初任務が、昨今急激に増えた難民の流入の原因を調査せよとの王命だった。そのため第一騎士団は、遙々ゼーゲ山脈を越えてきたのだ。

ユリウスは十五歳の離れた兄をひたと見据え、口を開いた。

「確かにそれはこの僕が口にしたことです、兄上」

「だったら」

「しかし状況が変わりました」

「状況？ それはおまえが抱えているその子どものことか」

クラウスの視線が、ユリウスの腕の中へと落とされた。

ユリウスはそれを妨げるように右肩を前に出し、小さな体を抱えた。

「見ないでください。減ります」

「……ユーリ」

「兄上。僕は、僕のオメガに会いました。ならばあとは何を置いても僕のオメガを守るだけ。違いますか？」

ユリウスの言葉に、クラウスの蒼い目が丸くなった。

兄の声と顔は父譲り、目の色は母譲り。ユリウスは逆に、顔は母に似て、目は父と同じ新緑の色をしている。

「『それ』がオメガ？」

「はい。僕のオメガです」

「待て待て、ユーリ。まだほんの子どもじゃないか。おまえも知っているだろう。第二性の分化は十歳頃からだと」

クラウスの指摘は正しい。

人類は神から、二つの性を与えられている。

一つは男女の性。男性には男性器が、女性には女性器があるから、これは生まれた時から判別できる。

そしてもう一つが、バース性と呼ばれるものだ。

バース性には、アルファ、ベータ、オメガの三種がある。

兄の言う通りバース性は普通、十歳頃から分化してゆく。男女性と違って外見的特徴が顕れるわけではないので、見た目ではバースの判別ができない。

見分ける方法は二つ。

一般的に広まっているのは、血液による判定だ。

薬師の一族が発明した特殊な配合の液体におのれの血を数滴垂らすと、アルファなら金色に、ベータなら変化はなく、オメガなら藍色に反応する。

もう一つの方法は、匂いである。

アルファとオメガは、双方のみがわかる香りを発しているとされる。アルファは誘発香^{ゆうはつこう}、オメガは誘惑香^{ゆうわくこう}と呼ばれる。

ベータの鼻にはほとんど感知できない匂いなので、アルファの香りに反応すればオメガ、オメガの香りに反応すればアルファ、と判別できるというわけだ。

しかしこの匂いによる判別には阻害要因が存在するため、正確性には欠けた。

阻害要因とは、アルファやオメガのバース性の制御用に開発された抑制剤のことだ。

ユリウスたち騎士団に属するアルファは、任務時や遠征時にはこの抑制剤を使用するため、オメガの匂いの影響を受けにくい。

なぜ抑制剤が必要なのか、と問えばサーリーク王国のアルファは皆、口を揃えてこう答えるだろう。理性を失ってオメガをいたずらに傷つけないためである、と。

ユリウスがアルファとして分化したのは十歳の頃。以降は兄たち他のアルファにならつて必要時には抑制剤を服用してきた。

それなのに、だ。それなのにわかった。

これが僕のオメガだと、抱き上げた瞬間にわかってしまった。

「未分化だろうがなんだろうが、この子が僕のオメガだという事実に変わりはありません。という

わけで僕は今からこの子の世話に全力を注ぎますので」

だからさっさと場所を空けてくれ、と眼力で訴えると、前に立ちはだかっていたクラウドが脇へ寄り、天幕の奥へ立ち入る許可をくれた。

天幕の奥にはやわらかな布団が用意されている。

なぜわざわざ兄の天幕へ来たかと言うと、この寝具があるからだ。ユリウスら一介の団員は共用の天幕に薄い毛布を敷き詰めて雑魚寝をするが、騎士団長は専用の天幕を一人で使用する。だからこの子を保護するには、ここが一番なのである。

ユリウスは奥に敷かれた綿詰め寝具の上に、腕の中の子どもをそっと横たえた。子どもはぐったりとしたまま、わずかも動かない。

世話をすると言っても、さて、何から手をつけたらいいものか。

「ロンバード」

「はいはい」

ユリウスの呼びかけに、天幕の入り口で待機していた男が投げやりな返事を寄越した。それに構わず、ユリウスは慣れた口調で命令した。

「風呂の支度^{しど}をしろ」

「だから上官を顎で使うなど……ってあんた、そんな弱ってる子どもを風呂なんかに入れたらまず間違いなく死にますよ。殺したいなら別ですけどね」

「はあ？ おまえバカなの？ 殺したいわけじゃないでしょ」

「バカはあんたですよ、ユリウス様」

ロンバードは半眼となり、不敬なセリフを吐いた。

「……風呂がダメなら食事だな。肉だ。肉を持ってきてくれ」

「……………」

絶句したロンバードの視線がユリウスの顔を離れ、ゆっくりとクラウドスへ向けられた。

クラウドスは即座に男から顔を背けた。

「団長、言ってもいいですか。嫌とは言わせませんよ」

耳を塞いで天を仰いだクラウドスだったが、彼の嘆きにロンバードは耳を貸さない。

「歳の離れた弟君を可愛い可愛いとあんなたち兄弟が寄ってたかつて甘やかした結果がこれですよ、これ！ 騎士団の試験には勝手に紛れ込むわ、いつの間にか戦闘訓練には参加してるわ！ どうしてもというから今回の任務にも加えたのに、それを放棄して子どもの世話をすると言うわ！ 王家の教育ってのはいったいどうなってるんですか！ 大体自分で着替えの一つもしたことがない王子様が、どうやって子どもの世話をするって言うんでしょうかね。こんな弱って死にかけの子どもに肉を与えようなんて王子様が！」

部下の剣幕にたじろいだクラウドスが、両手をどうしようと広げて宥^{なだ}めにかかる。

「ロンバード、ロン、落ち着け。おまえの言いたいことはよくわかった。ユーリ、聞いた通りだ」

「僕は何も聞こえませんでしたけど」

しれっと返すと、ロンバードが鬼のような形相で睨んできた。クラウドスがひたいを押さえ首を横に振る。

「ユーリ。おまえに子どもの世話は無理だ。いいか、おのれのオメガを守りたいというアルファの

本能は、私にも痛いほど理解できる。だが、職務を放棄して、できもしないのにその子の世話に明け暮れることが、本当にその子を守ることになるのだろうか。よく考えなさい。その子には医師や薬師、専任の侍従をつけて、おまえは騎士の仕事をもっとする。立派な騎士となり、私や兄上と一緒に天下泰平の国づくりを進めることが、ひいてはその子を守ることに繋がるだろう」

「……兄上、それではお尋ねしますが、今の言葉をエミール殿の前でも言えますか。たとえばエミール殿に命の危機が迫っている時に、エミール殿を他の者に任せて国のために騎士の仕事をもっとしてけると、言えるのですか」

ユリウスが平坦な声で淡々と切り込むと、十五歳上の兄が子どものように叫んだ。

「言えるわけないだろ!!」

エミールというのはクラウドスの伴侶で、最愛のオメガの名だ。

「サーリーク王国のアルファたるもの、おのれのオメガをおのれの手で守らずしてどうする！ いいか、アルファの能力はすべてオメガを守るためにあるのだ！」

凜とよく通る声が天幕を揺らした。

我が意を得たり、と笑ったのはユリウスで、言葉もない、と絶句したのはロンバードだ。

「なら僕がこの子の世話をすることに否やはありませんよね」

「む……致し方あるまい」

「というわけで兄上。僕がこの子の世話をきちんとできるよう、誰か指導係をつけてください」

ダメ押しとばかりに、ユリウスは顔全体でにつこりと微笑んでみせた。

年の離れた兄が、自分のこの表情に弱いことはこれまでの経験でよくわかっている。

案の定騎士団団長の目尻が一瞬デレッツと垂れ下がった。

しかしすぐに表情を引き締めたクラウスが、二度ゆつくりと頷いた。

「エーリツヒの隊に小児も診ていた医師がいたはずだ。それから薬師と……そう言えばロンバード。おまえには子どもが三人居たな。子煩悩な夫ですと細君に惚えられた覚えがある。とすると子どもの世話はお手の物だな」

「……こっの兄バカ王子が！」

ロンバードが呪詛のように口の中で吐き捨てた。

聞こえないふりをしたクラウスが、有無を言わせぬ声で彼に命じた。

「我が可愛い弟たつての頼みである。しっかりと仕えよ」

第二章 至福なる看病

特権、という言葉がある。ある身分の者だけが持つている権利という意味である。

新米騎士のユリウス・ドリツテ・ミュラーがなぜこれほど自由な振る舞いができたのかと言うとそれは、この特権のなせる業であった。

ユリウスにはサーリーク王国王家直系の三男、という高貴なる身分が備わっている。

父が現国王。第一王子で継承権一位が長兄のマリウス。第二王子で騎士団長のクラウスが次兄。

王后（つまりユリウスたちの母）アンネリーゼは二人の王子を立て続けに出産し、乳母や侍従たちとともに子育てに熱心に関わった。

そして長男のマリウスが十七で成人を迎えた頃、次男のクラウスが齢十五歳で騎士団に入団を果たして兄を支える立場になるという決意を周囲へ示した。そろそろ子どもたちも自立したので夫婦水入らずで旅行でも、と話をしていた国王夫妻は、思いがけず三男のユリウスを授かる。

国王一家はこの歳の離れた末っ子をたいそう可愛がった。家族総出で可愛がった。家族だけでなく城の誰もが、輝くばかりの金髪と透き通る新緑色の目の天使のごとく愛らしい第三王子にメロメロになった。

生まれた時から周囲の愛情を一身に浴びて自由奔放に育ったそのユリウスは今、医療と看護と子育ての知識を熱心に吸収している最中である。

場所は王城のユリウスの私室。不器用な手つきでおしめを替えているユリウスの背後から、ロンバードと元乳母のグレタがハラハラとしたような眼差しを送っていた。

そのうるさい視線を無視して、ユリウスは清潔な白い布を、ベッドに横たわる子どもの股間へと当てた。子どものそこにはささやかな男性器がちょこんとついている。

男の子なのだな、と最初に目にした時にユリウスは思ったが、男女の別などはどうでも良かった。この子が僕のオメガ。おのれのオメガをおのれの手で世話する至福。これ以上のしあわせなどきつと、どこにも存在しない。それなのに。

「ああダメですダメです。そこにしわが寄ってます。ちゃんと広げて……そんな当て方をしたら漏れてしまいますよ。もっとう……いえ、違います。坊ちゃん、ちよつとそこを」

「どかないってば！」

口うるさいグレタへ顔を半分振り向けて、ユリウスは眉をしかめた。

彼女はユリウスの乳母だった女性で、その後も長く世話係を務めてくれた。幼少期のすべてを知られているからだろうか、このグレタに対してユリウスは中々強く出ることができない。

ロンバードが広い肩をそびやかし、これみよがしな溜め息をこぼす。

「意地張らずにグレタさんにやってもらった方が早いしその子も無駄に体力を奪われないでしょうに」

「意地でやってるんじゃない。僕の役目だからしてるんだってば。おまえもうるさいなあ」

ユリウスはイライラと眉を吊り上げた。

ロンバードはユリウスのせいで早々に騎士団の任務を外されて帰国することになってしまったの

で、そのことを三日経った今も根に持っているのだ。

もともとロンバードは騎士団長が直々に指揮する第一部隊の所属で、クラウスの右腕ともいわれる活躍を見せていた。その腕を高く買ったクラウスが、ロンバード曰く兄バカ丸出しの人事で、末弟ユリウスの護衛として王城勤務へと変更したのだ。ロンバードの希望も聞かずに、勝手に。

泣く泣く騎士団を離れたロンバードは、ユリウスが騎士団に入団したことで久方ぶりに自身も古巣へ戻ることができたと喜んでいたので、任務半ば（というかほぼ初日）で離脱する羽目になったのだ。それは恨み言の一つも言いたいだろう。

ネチネチと恨みがましい視線と、ハラハラと心配げな視線を送ってくる二人から顔を背けて、ユリウスは苛立ちを抑えるために眠り続けている子どもの顔をじつと見つめた。

見ているだけで不快感は消え去り、得も言われぬ清涼感と多幸福感が胸に満ちてくる。すごい。なんという効力。

あの後……ユリウスが山の中でこの子を拾い、兄の天幕で保護した後、ここでは充分な世話ができないと判断して早々に帰国を決めた。

備蓄入れにしていたカゴを拝借し、やわらかな布をしっかりと敷き詰めて寝心地よく整えたそこに、小さな体を横たえた。

その姿はさながら巣で眠る小鳥のようで、ユリウスは巣と化したそのカゴを自ら大事に抱えて、ロンバードと薬師を伴い、急ぎ王城へ舞い戻ったのだった。

兄の天幕で診てもらった医師の見立てでは、この子は極度の栄養失調と脱水、眼病に皮膚病も患っており、生きているのが奇跡、ということであった。

それを聞いたユリウスは、子どもの耳元で囁いた。

「僕に会うために頑張ったんだよね」

こんなに幼く小さな体で、死の淵でなんとか踏ん張ってユリウスの訪れを待っていたのかと思うと、胸が振れそうに苦しくなった。

無事に子どもを連れ帰り、以降はユリウス手ずから世話をするべく、教育係にロンバードとグレタを付けて、医師や薬師からも知識を吸収しながら現在は絶賛修業中、というわけだが。

しかしこの教育係の二人がとももうるさい。自分がそんなに間違った行動をしているとは思えないのに、あれはダメこれもダメと横から口を挟んでくる。

慣れない手つきでおしめを替えたユリウスは、今度は食事の支度を始めた。

薬師の用意した数種類の粉薬を、砂糖と一緒にあたためた山羊のミルクに溶かし、人肌に冷ましてから哺乳瓶へと流し込む。

下準備を終えたらベッドへと上がり、ぐったりと寝ている子どもをゆっくりと横抱きにする形で起こし、膝の上に乗せる。右腕で骨ばった背を支えて、左手に哺乳瓶を掴む。

ひび割れた唇の隙間にぐいと先端を突っ込むと、薄く小さな歯に阻まれた。

「いい子だから口を開けてごらん」

やさしく囁いて、おのれの指を子どもの口の中へ入れた。

薄く小さな歯を辿り、わずかな空間をこじ開ける。そこに吸い口をぐいつと押し込むと、もう一度耳元で語りかける。

「甘くて美味しいよ。吸って」

ユリウスの言葉に呼応するように、ちゅ、と子どもが吸い口を吸ったのがわかった。

「いい子」

その子を見せるささやかな反応に、愛しさが込み上げる。可愛い、可愛いと内なる声が大歓声を上げていた。

侍医に固く止められているためまだ風呂に入れることができていない子どもは、垢じみたままで、客観的に見て可愛いとは言えない外見だ。

あたたかい手ぬぐいで体を拭いたり、手や足だけを湯に浸したりしたおかげで、拾った時より汚れは落ちていたけれど、侍女たちが思わず眉をひそめてしまうほどにはみすばらしい。

ずるずると長かった髪は傷みすぎていたから、理容師を呼んでバツサリ切ってもらった。その際、頭皮につく虫が山のように見られたため、薬師が専用の軟膏を必死の形相で小さな頭に塗り込んでいた。

爛れた目の周囲は、煮沸したきれいな水で湿らせた脱脂綿で毎日拭き取り、薬を塗布している。手足の赤く変色した部分も同様の処置を行い、そこには包帯を巻いた。

痩せて、うすよごれて、瞼は腫れ、皮膚病もある子どもを見て、かわいそうと思えど可愛いと微笑む者は居ないだろう。

しかしユリウスにとっては魂が打ち震えるほどに可愛く、愛らしく、離れがたい存在だった。

今も途切れ途切れに、こく、こく、と喉を鳴らしてミルクを飲む様を見て、駆け回りた衝動に襲われる。

僕のおメガが！ 僕の手から！ ミルクを飲んでいる！！

感動にひたるユリウスとは裏腹に、子どもの口の動きはすぐに弱々しいものとなり、やがて吸い口を咥えることもやめてしまった。

ユリウスは無理をせず、哺乳瓶を引いた。よしよしと短い髪を撫で、ひたいにキスを落とす。

「ゆっくりおやすみ、僕のオメガ」

愛を込めてそう囁き、瘦せた体を元のように横たわらせる。

この後は医師が来て、栄養剤を針で血管に直接流し込む治療が行われる予定だ。一日に二度施されるその治療を見るたびに、ユリウスの胸は痛んだ。

僕のオメガに針を刺すなんて、とその瞬間を初めて目にした時は殺意を覚え、医師に向かって剣を抜こうとしたものだが、ロンバードに全力で宥められ、今ではそれが治療だということは理解している。

しかし小枝のような腕に針が沈んでゆくを見るたびに、ユリウスはおのれの腕がチクリと痛む気さえした。

早く元気になってほしい。

その一心で昼夜を問わず子どもの世話をする。

更衣さえ一人でしたことがなかったようなユリウスが、一生懸命学びながら子どもの看病をする姿に、初めは呆れ気味であったロンバードやグレタ、部屋づきの侍女や侍従たちの態度も、次第に変わってきた。

三十日が経過した頃には子どもに関わる誰もが、王子にならえとばかりにその回復を全霊で祈るようになっていた。

しかし子どもは^{あまた}腫れが和らぎ、^た爛れが薄らぎ、手足の皮膚病も癒えて小ぎれいにはなつてきても、まだ目覚めない。

治療の甲斐なく死んでしまうのではないか、と、誰も口にはしなかったが内心ではそんな不安を抱えていた。

けれどユリウスには確信があった。

僕のオメガが、僕をひと目も見ないうちに亡くなるわけがない、と。

根拠のない確信ではあったが、死の女神が迎えに来たとしてもぜったいに僕が守るから、とユリウスはひたむきに、子どもの看病をしたのだった。

第三章 目覚めの時

サーリーク王国の国土は東西に長く、南には海が広がり、北には峻厳な山々がそびえている。温暖な氣候に恵まれた国だが、春夏秋冬の季節の移り変わりはあった。

ユリウスが子どもを拾ってから、四季が丸々一巡してなお、子どもは目覚めなかった。

ユリウスは付きつきりで子どもの世話をしたかったが、それができたのは最初のふた月が限度だった。

王子には特権があるとともに、義務がある。王国を治めるために尽力するという義務が。

ユリウスはロンバードとともに騎士団へ戻り、日中は鍛錬に励んだ。夜は私室で、子どもの世話をして過ごす。

鍛錬は飽きるのに、この子の世話は飽きるということがない。

最近のユリウスの楽しみは、風呂の世話だ。

ようやく医師の許可が下りたので、寝台の横に簡易の浴槽を運び込ませて、両腕に抱えた子どもを、湯船にちゃぽんと浸らせる。まるで赤子の湯あみのようだ。

初めて入れた時は湯に垢がたくさん浮いていた。毎日手ぬぐいで清拭していたのに、これほど垢が付着していたのかと驚いた。

それでも二日に一度、定期的に入浴させるようになってからは、湯は透明を保っている。

黒かった肌は、磨いてみれば真っ白になった。爛れや赤みはすっかり完治して、子どもらしいやわらかさを取り戻している。

灰色に固まっていた髪は、サラサラとした銀糸だった。虫ももう湧いていない。絹のような手触りはユリウスをいつも夢中にさせる。

瞼の腫れは跡形もなく、閉じた目にはふさふさの睫毛が見てとれた。

可愛い。ひたすらにそう思う。

可愛い。可愛い。早く起きないかな。早く目が見たいな。

この子の目が月のように透き通った金色だということを、ユリウスは知っている。医師が目診察で瞼をこじ開けた時に見えたのだ。

僕の髪と同じ色だ、と嬉しくなった。

いや、この子の目の色の方が少し薄くて、若干青みがかっていたか。

早く起きて、その目に僕を映してくれないかな。

そう思いながら、ユリウスは慣れた手つきで子どもをきれいに洗い上げ、ふかふかの湯上り用のタオルで丁寧に水気を拭いた。

おしめをつけて、前開きの服を着せたら、留め具をパチパチと留め、寝台に横たえる。

「手慣れたもんですね」

部屋の扉横に控えていたロンバードが、感心したように呟いた。

「そりゃあこの一年毎日してるからね。お休み、僕のオメガ。今日もとっても可愛かったよ」

ちゅ、と目元にキスを落として、ユリウスは子どもに布団をふわりと被せた。

一日二回の針を使った栄養剤の注入は、今は一回に減っている。口から入る量が少しずつ増えているからだ。

体重も少しだけ増えたとし、順調に回復しているという手ごたえはあった。

この子が目を覚ます時、自分はいったいどんな反応をするだろう。ユリウスの想像する未来には楽しみしかない。

ユリウスは自身も寝る支度を整え、子どもの眠る寝台へと潜り込んだ。

腕にすっぽりと収まってしまふ小さな体をやわらかく抱き寄せ、甘い香りを胸いっぱい吸い込む。まだ幼いからか、性的な衝動を掻き立てる匂いではない。ひたすらに守ってやりたいと感じさせる、庇護欲を掻き立てるような匂いだ。

ユリウスはうつとりと目を細め、子どもの銀系の髪を撫でた。

尽きることのない愛情が、胸の奥底から湧き出して、ユリウスの全身を満たす。

子どもの体温を感じながら、ユリウスはゆるやかに眠りについた。

それからさらに季節が一巡して、ユリウスは十九歳になった。

第三王子の誕生日を祝おうと、朝から城内が騒がしい。

ユリウスはあらかじめ準備されていた服に袖を通しながら、いつものように眠り続けている子どもの頬へキスを落とした。

「今日は僕の十九歳の誕生日だよ。きみが起きたらきみの誕生日も教えてほしいなあ。きみはきつと冬生まれだね。そんな気がするよ。僕は一日留守にするけど、また夜に戻ってくるからね。いい

子でおやすみ、僕のオメガ」

反応のない相手に話しかけることに慣れ、よしよしと小さな頭を撫でてから離れようとした、その時だった。

子どもの瞼が、震えた。

手が動いたり瞼が動いたりしたまに見せる動作だったので、ユリウスは特に気にしなかった。

しかし。今まで、ずっと閉じていた目が。

ほんの少し……ほんの少しだけ持ち上がったではないか！

「……っ!!」

ユリウスは息を呑んだ。限界まで見開いた双眸で、声もなく、その子を凝視する。

子どもの眉が苦しげに寄せられた。布団の中でもかくように手が動いている。

衣擦れの音でそれを悟り、ユリウスは咄嗟に掛布団をめくった。

上にあつた重さがなくなったことでしょうか、うすく開いている両目を塞ぐように覆った。

『……め、……いたい』

掠れた声が、ささやかに空気を揺らす。

異国の言葉だ。意味はわからない。しかしユリウスは子どもの仕草から、反射的に窓辺に駆け寄り、分厚いカーテンを三分の二ほど閉めた。そうすることで部屋は適度な暗さになる。

「まぶしい？ 大丈夫？」

寝台の傍へと素早く戻り、囁くように問いかける。

しかし子どもはユリウスの声には反応を見せずに、目を押さえたままで静止していた。固唾^{かたず}を呑んでその様子を見守っていると、やがて胸のあたりが規則正しく上下し始めた。眠りに落ちたのだ。ユリウスは震える手で、子どもの細い手首をそっと握り、手を元の位置へと戻した。布団をかぶせてから、まじまじと寝顔を見つめた。

今、目が開いた。声も出した。

夢じゃない。ユリウスの願望が見せた幻なんかじゃない。

現実には、ちゃんと起きたのだ！

叫び出したいような衝動が全身を駆け抜けた。

ユリウスは歓喜の悲鳴をなんとか呑み込んだ。

本当は叫びたかった。叫んで、もう一度起きてと子どもを揺さぶりたかった。

けれど死神の腕からすんでのところで逃れたこの子には、睡眠が必要なのだとわかっていたから。ユリウスは必死に自分を律して、子どもの目元へとキスを落とした。

「ありがとう。僕の誕生日に合わせて起きてくれるなんて、最高の贈り物だよ」

こころの底からのお礼を述べて、ユリウスは弾む足取りで部屋を出た。

後ろ手に扉を閉めた途端に嬉しさが弾け、廊下で控えていたロンバードに大声で命じる。

「ロンバード！ 侍医を呼べ！ 僕のオメガが起きてしゃべった！ 目を開けたんだっ！」

まくしたてたユリウスをポカンとした表情で見たロンバードが、遅ればせながら言葉の意味を理解して、飛び上がった走り出した。そして、驚異の速さで医師を抱えて戻ってくる。

ろくな説明もなく引つ張ってこられた侍医は、治療の甲斐なく子どもが死んだとも思ったのだ

ろう、真つ青な顔をしていた。しかし、興奮に頬を紅潮させたユリウスの表情に、これは良い意味で招集されたのだと悟り、安堵で倒れそうになっていた。

医師は丁寧に子どもを診察したが、この日、子どもの目はもう開かなかった。

しかし翌日以降、ユリウスがおはようのキスをする時に、子どもの瞼^{まぶた}は少し持ち上がるようになった。

「おはよう、僕のオメガ。今日も可愛いね」

ユリウスはすっかり習慣となった挨拶を口にして、子どもの頬にキスを落とす。

「僕はユリウス。ユ、リ、ウ、ス、だよ」

一文字ずつはつきり発音し、自分を指さして名乗っても、子どもはたいてい、言葉の途中で目を閉じてしまう。

けれど日を追うごとに徐々に、金色の瞳に力が宿りつつあることに、ユリウスは気づいていた。だから幾度も幾度も、毎朝子どもへ向けて名乗り続けた。

「僕はユリウス、ユリウスだよ」

そして、ユリウスの誕生日からひと月が経過しようとした頃。

「おはよう、僕のオメガ」

いつものように朝の訪れを告げると、それを待っていたかのように子どもの瞼^{まぶた}が持ち上がった。少しの丸みを宿す頬をひと撫でし、

「今日も可愛いね」

と微笑んで、ユリウスはおのれの顔を指さした。

「僕は」

「ゆ、……す」

「……っ!!」

子どもの唇が動いた。掻き消えそうなほどにか細い声が、確かにユリウスの名を象ったのだ。

ユリウスは逸る鼓動を抑えきれずに、ベッドの上に半身を乗り出し、もう一度自分を指さした。

「僕は？」

「ゆ、い、い、す」

子どもの金色の双眸^{まなこ}が、はっきりとユリウスの姿を映している。

ユリウスは感動に全身を震わせた。

なんて愛らしい声。なんて愛らしい目だ。

「そう、ユリウス。ユリウスだよ。言にくい？ ユーリでもいいよ。身内はみんなそう呼ぶ」

興奮のままに早口で告げ、それから我に返り、ゆっくりと言い直した。

「ユーリ。ユ、ウ、リ」

「……？」

戸惑うように子どもがまばたきをする。

ユリウスは声の音量を少し上げて、もう一度、一音ずつを区切りながら伝えた。

「ユ、ウ、リ」

「ゆ、う、い」

ふつくらとした唇が、可愛らしく尖って、ユリウスの言葉を真似て、たどたどしく発音される。

その仕草が驚異的に可愛すぎて、ユリウスはその場に転がって暴れ回りたくなった。

やばい。可愛い。おかしくなるぐらい可愛い。

ユリウスは必死に理性を繋ぎ留めながら、やさしい声で問いかけた。

「僕は、ユーリ。きみの名前は？」

おのれを指さして改めて名乗り、続けて子どもを指さす。

子どもの視線はユリウスの指の動きを追って流れ、ぼんやりと静止した。

「きみの、名前は？」

重ねてゆっくりと問うと、子どもの唇が動き……何かを言おうとした唇から、コン、と咳が出た。

コン、コン。乾いた咳が小さく空気を震わせる。

おっといけない、とユリウスは慌てて寝台の横の卓上から哺乳瓶を取り上げた。

水分はこまめにあげなければしないと医師から言われていたため、いついかなる時もここには飲み物が用意されているのだった。

中身はハチミツを溶かし込んだ果実^{ジュース}水だ。

「喉が渴いてる？ 今日林檐水だよ。甘くて美味しいよ。ゆっくり起こすからね、いい？」

片手に哺乳瓶を持ったユリウスは、いつものように子どもの背を抱き起こす。自身は背後に回り込んで座ると、子どもを自分にもたれかからせて、口元へと吸い口を近づけた。

「口を開けて」

やわらかな唇の端を指の腹で軽く押して、吸い口を隙間に潜り込ませると、子どもがもごとく口を動かしてそれを吸った。

こく、こく、と喉の鳴る速度が、眠っていた頃よりも速い。それが嬉しくて、ユリウスは喜びを囁み締めながら、おのれのオメガが果実水ジュースを飲む様をつぶさに見つめた。

やがて動きがにぶくなり、ふさふさの睫毛が重そうに下がってくる。

寝てしまう、とユリウスが思うと同時に、子どもの瞼まぶたが完全に閉じてしまった。

安心きったようにユリウスに体重を預けて眠る子どもの頬に、ユリウスは神の国に召されるのではないかと思うほど満たされた気持ちで、そつとキスをした。

「またあとでお話ししようね、僕のオメガ」

その時は名前が聞けるといいなと願いながら、ユリウスは小さな体を横たえる。そして、鼻歌混じりにロンバードを呼び、自分のオメガがどれほど可愛かったか滾々こんこんと語り聞かせたのだった。

少しおかしいですなあ、と言われたのは膝に抱き上げた子どもに食事をあげていた時のことだった。

一日の大半を寝て過ごす子どもは、それでもほんの少しずつ起きている時間が長くなっている。初めて目を開けた時からひと月が経過した今では、起きてユリウスと一緒に朝食を食べられるほどに回復していた。

しかし、まだ色々なことが覚束おぼつかない。食事の途中で寝てしまうこともあったし、スプーンやフォーク、皿を取り落としてしまうこともしばしばだ。

だからユリウスは子どもを膝に座らせて、その背を軽く支えながら、小さな木の匙ですくったスープや小さくちぎったパンを、親鳥よろしくせつせと口に運んでやっているのだ。

ユリウスのその過剰とも言える世話を、片眼鏡姿の侍医が眉をやさしく下げて眺めている。

ベルンハルトという名のこの医師は、現国王（つまりユリウスの父）の主治医であり、王城が抱える医師団の長だ。

好々爺然こうこうやぜんとした外見の彼がいったい何歳なのか、すでに齢百よひゃくを超えているのではないか、いやいやもしや不死の医療を編み出して永遠の命を手に入れているのではないか、などという噂話は、医師団を筆頭に城のあちこちで囁かれていた。

ユリウスはこの年齢不詳の侍医が好きだ。幼い頃より彼に叱られたという記憶がないし、いつも穏やかにニコニコと笑っているから、彼の周囲の空気ですらやわらかく感じる。

何よりベルンハルトは、余計な差し出口をしない。

今も、ユリウスが子どもの口に甘いミルクに浸したパンを入れてやっても、過保護ですよ、なんて注意は飛んでこなかった。

これがグレタならこうはいかない。

先日、ユリウスが今と同じように子どもを膝に抱っこして哺乳瓶で果実水ジュースを与えていたら、「目を覚ましてるんですから、ご自分で召し上がられるでしょうに。過保護はいけませんよ」と言われて哺乳瓶を取り上げられるという事件が勃発した。

グレタの言い分はわかる。子どもは……小さくて幼いけれど、赤子ではない。

拾った時が何歳ぐらいだっただろう、五歳？ 六歳？

それから二年が経過したから（けれどこの期間この子はずっと寝ていたから勘定に入れなくていいと、ユリウスは思う）、今は七歳か八歳ぐらいか。

当然、哺乳瓶で果実水^{ジュース}を飲ませてもらうような歳ではない。

しかし、である。

ユリウスの腕の中で、ユリウスが持つ哺乳瓶に愛らしい口で吸いついて、コクコクと喉を鳴らして飲むあの可愛い姿を眺めることがユリウスにとって至上の喜びなのだ。その時間を取り上げるなんて、いくら元乳母のグレタであつても許されることではなかった。

哺乳瓶強奪事件（大きな声で言えないが、この二年でグレタに強奪されたものは哺乳瓶以外にもたくさんある）をきっかけに、この子を甘やかしているところを見られたら邪魔をされる、とユリウスは学んだ。以降、食事の際は支度^{したく}が整った段階で侍女たちを部屋から追い出し、誰も入っていないよう厳命した上で、雛鳥を可愛がるようにおのれのオメガの世話を焼いていたのだった。けれど今日はその真つ最中にベルンハルトのおとないがあつた。

食後にしてくれと言おうとしたが、ベルンハルトも忙しい身だ。それにグレタのように口うるさくないので大丈夫だろうと判断したユリウスは、侍医の入室を許可した。

ベルンハルトはいつものようにやさしげな表情でユリウスたちを眺めていたが、子どもが口腔内のパンをこくりと嚥下したタイミングで、「少しおかしいですなあ」と切り出してきた。

「ベンまで過保護とか言うのはやめてくれ」

ユリウスの言葉に、ベルンハルトが喉奥で笑つてゆるく首を横に振る。

「いえいえ、若君のことではございません」

侍医の「おかしい」が自分の態度でないとすると、子どものことか。

ユリウスは表情を引き締め、白髪の医師を眼差しだけで促した。

ベルンハルトが近くまで歩み寄り、ユリウスの膝の上の子どもの眼前にてのひらを翳^{かざ}す。

「失礼しますよ」

幾度か子どもの前で手を動かした後、胸元のポケットに入れていたペンを取り出し、前後左右にそれをゆつくりと振った。

子どもの金色の目が、ペン先の動きを追っている。

「視力？　ちゃんと見えているよね、ねえ？」

ユリウスが小さな体を揺すり上げて問いかけると、子どもがこちらを振り仰ぎ、コトンと首を傾げた。

その仕草を見て、侍医の片眼鏡^{モノクル}の奥の瞳が細まる。

「その子はいまだ、しゃべりませんなあ」

「この国の言葉がわからないんだよ。名前もまだ聞けてない。でも僕のこととはわかるよね」
ね？　とやさしく問いかけると、子どもがまた首を傾げる。

ユリウスはおのれを指さして、

「僕の名前は？」

とゆつくりと発音した。

その仕草に反応した子どもが、たどたどしい口調で答える。

「ゆうい」

瞬間、ユリウスの頬がゆるんだ。やばい。可愛い。可愛すぎる。

思わず頬ずりをしようとしたユリウスだったが、

「若君、もう一度小さな声で言ってみてください」

と侍医に言われ、怪訝な表情になった。

ベルンハルトに目をやると、頷きが返ってくる。

ユリウスは指示の通り小声で先ほどと同じ言葉を発した。

「僕の名前は？」

「……」

子どもは無反応だった。金色の双眸はユリウスへ向けられていたが、それは不思議そうにまたたくだけで、返事はなかった。

ベルンハルトが白い顎髭を撫で、ふむ、と首肯した。

「ベン？」

「若君、恐らく、この子は聴覚が弱い」

「え？」

「小さな音は拾えないんです」

ベルンハルトはそう言って、口笛を吹いた。

ピュー、とささやかな音が鳴ったが、子どもはベルンハルトの方を見ない。

次に侍医はパン！ とてのひらを打ち鳴らした。乾いた音が響く。

そこでようやく子どもがハツとしたように身じろぎ、きよろきよと顔を動かした。

「……本当だ。全然気づかなかった」

ユリウスは半ば茫然と呟いた。

耳の不調にまったく気づかなかったおのれを恥じる気持ちが湧いてくる。

「若君は、言葉のわからないこの子へ話しかける時、今のようによつくりと、はつきりと発音されておられた。それで気づかなかったんでしょなあ」

ベルンハルトがやさしい慰めをくれる。しかしすぐに表情を曇らせ、言いにくそうにしわだらけの口元を動かした。

「若君、恐らくですが……その子は視力も弱い」

「えっ？」

「見えているのは確かですが、物の形をはつきりとは捉えていないようですね」

「……そうなんだ」

ユリウスは腕の中の子どもを見下ろし、その冬の月のような瞳を覗き込んだ。

視力が弱い、と言われて、思い当たることがあった。

二年間寝たきりだった子どもは、筋力が落ちていてまだうまく歩けない。だから普段はユリウスが抱き上げて移動しているが、回復訓練はしなければならぬ。

そこでロンバードが足元に小さな車輪のついた馬蹄型の歩行器を持ってきてくれたのだが、子どもがそれを使って歩くと、ベッドや筆筒などあちらこちらにぶつかり、見ているユリウスが胆を冷やして途中で切り上げるのが常だった。

筋力が戻らないからうまく歩けないのだとばかり思っていたが、もしかして目が見えにくいから

ぶつかったのかもしれない。

「若君。お許しただけるならば、詳細な検査を」
「頼む」

考える間もなくユリウスは即答した。

ふと見れば子どもはユリウスの胸にもたれて眠っていた。

唇の端についたパンの欠片を指の腹でそっと拭い、ユリウスは「大丈夫だよ」と囁く。

「きみがどんな状態でも、僕が守ってあげるからね」

アルファとしての誓いを胸の中に打ち立てて、ユリウスは可愛い可愛いオメガのこめかみにキスをした。

後日、ユリウス立ち合いの下で子どもの診察が行われた。

血液の検査をするためにまた針を血管に刺さなければならず、ユリウスは彼のオメガをずっと抱きしめていたが、当の子どもは眉一つ動かしもせずに、諾々とそれを受け入れていた。

採血のついでにバース検査も行った。

薬師の掲げた白い器に入った液体の中へ、子どもの血を数滴垂らす。

変化はすぐに起こった。透明な液体が深い藍色へと染まる。

間違いなくオメガだ。

こんな幼くして分化するのは非常に珍しい、と薬師も目を丸くしていた。

もしかすると子どもは、見た目ほど幼くはないのかもしれない、との指摘もあった。

通常は十歳頃で分化する第二性だ。過去には七歳で分化した例もあることから、ユリウスが二年

前にこの子からオメガの誘惑香を感じとったというならば、その時点で七歳に達していたのかもしれない、と薬師は言った。

しかしそうであるならば、子どもの身長も体重も、同年代の平均のそれをまったく満たしていないのはどう解釈せよというのか。

痩せ細り、泥まみれで死にかけていた子どもが、しあわせに暮らしていたとは到底思えずに、ユリウスの胸はしくしくと痛んだ。

ひと通りの診察を終え、検査結果を携えたベルンハルトからユリウスに告げられた言葉は、非常に衝撃的なものであった。

「この子は、五感が総じて弱いすなあ」

ユリウスと子ども、そしてロンバードとベルンハルトしか居ない部屋の中で、片眼鏡モノクルの侍医が重々しくそう告げた。

「五感……！」

「五感ってことは、あれですか、目と、耳と」

指折り数えようとするロンバードを制して、ベルンハルトが説明を続けた。

「視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五つですな。つまり、目が見えにくい、耳が聞こえにくい、味がわかりにくい、匂いがわかりにくい、皮膚感覚が伝わりにくい」

「最後のがよくわからないな。具体的には？」

ユリウスが問えば、ベルンハルトが淀みなく答える。

「一般的に触覚とは、皮膚で感じる刺激のことですな。たとえば私が若君の肩に触る。若君は触ら

れたな、とわかる。これが触覚です。この子の場合、背後から腕に触れてみてもまったく反応しませんでしたなあ。さらには、温、冷、痛などの刺激も伝わりにくいようです」

「大変じゃないか！」

ユリウスは思わず叫んでいた。

大声になったから聞こえたのだろう。子どもの目がこちらを向いた。

じっと見つめてくる、金色の瞳。

ベルンハルトによると、物の輪郭や形はわかるが、細部までは見えていないだろうとのことだ。

ユリウスの顔も、きちんとは見えていないのだろうか。

「ゆうい」

子どもがつたない口調でユリウスの名を呼ぶ。

少し不安そうな声だ。ユリウスの動揺が伝わってしまったのか。

「なんでもないよ。大丈夫」

ユリウスは子どもを抱き上げて頬ずりをした。

可愛い可愛い、ユリウスのオメガ。

「見えなくても聞こえなくても大丈夫。僕が守るよ」

囁くユリウスの横で、ロンバードが医師へと質問を重ねている。

「味覚がないってことは味がわからないってことですか？」

「ないのではなく弱いのです。まるでわからないわけじゃないけれども、わかりにくい」

「なるほど……。つまり」

「つまり、気をつけてあげなければならないことが山ほどある、ということですね、若君」

ベルンハルトが言葉の最後でこちらを向いた。

もちろん、とユリウスは頷いた。これまで以上に、この子を大切にする。

「だからと言って騎士団の仕事をしない、というのはなしですよ、ユリウス様」

ロンバードが口を挟んできた。

うるさい大男をチラと睨んで、ユリウスは鼻を鳴らした。

「そんなことはわかってる。だけど有事の際はこの子が優先だ」

キツパリと言い切ったユリウスに、ロンバードが嘆息をこぼす。

「そうならないように、見守りの目を増やしましょうかね」

「それは僕が居ない時だけにしてくれ。僕が居る時はこの子と二人でいい」

「へえへえ……ごほん、了解しました！ 我が君！」

おざなりな返事をしようとしてユリウスの冷たい視線に気づいたロンバードは、わざとらしい敬礼の後、そのまま回れ右をして退室していった。大方グレタと今後の相談をしに行っただろう。ユリウス不在の間、子どもの世話は主にグレタの仕事になる。

「ベン、他に気になることは？」

ユリウスは子どもを抱いたまま、侍医へと問いかけた。

ベルンハルトはやさしげなしわを目尻に作って、首を横へ振った。

「若君の看病の甲斐あって、体調は良くなってきていますなあ。ああ、一つだけ。その子の使っている言葉ですが……どうやら、どの国の言葉とも違う、と」

「え？」

ユリウスは怪訝に眉を寄せた。

「そのことで兄君が、話をしたいと仰せでしたよ」

兄君とベルンハルトが言うのは長兄、マリウス・エASTE・ミューラーのことだ。

ユリウスは鼻筋にしわを寄せて「うゝん」と葛藤したが、次期国王の呼びつけを断るわけにもいかない。しかも内容が、おのれのオメガに関わることなのだから。

「わかった。行ってくるよ」

ユリウスは渋々頷き、氣力の補給とばかりに子どもの首筋に鼻先を埋め、やわらかで甘いオメガの匂いを吸い込んだ。

第四章 長兄マリウスとの談話

「失礼します」

挨拶とともに一礼をしたユリウスは、長兄の私室に足を踏み入れるなり、

「いらつしやゝい」

と華やかに高い声と嫺^{たお}やかな腕に包まれた。

「よく来た」

その直後、張りのある低音が響き、がっしりとした腕がユリウスをぎゅっと抱きしめてきた。

「うわっ、い、痛いっ、兄上、あ、兄上、アマル殿がつぶれてしまいますよっ」

「あら、ユーリと一緒につぶれるなら本望だわ」

「妬けることを言うな。よし、ならこうしてやろう」

「きゃあ！」

兄が抱擁の力をぎゅっと強め、歓声を上げた妻の頬に口づけをし、ついではかりにユリウスにもチュッとキスをしてきた。

「あら、堂々した浮気なこと」

兄嫁のアマリーエが笑いながら、今度は兄の唇にキスをする。

なぜかユリウスを抱きしめたままラブシーンを繰り広げだした二人へ、これだからここに来るの

は嫌なんだよ、とユリウスは胸の中で呟きつつも、大人しくされるがままになっていた。

下手に逃れようとすると余計に構われることは、十九年の人生で学んでいる。

しばらくしたいようにさせていると、兄と兄嫁はようやく抱擁をほどこいて、椅子をすすめてくれた。長兄とユリウスは年が十七歳離れている。兄にとってユリウスは、兄弟というよりはもはや息子のような存在なのだろう。とにかくスキンシップが激しい。

おまけにサーリーク王国のアルファらしく、オメガの妻を溺愛している。

兄嫁アマリーエは女性オメガで、ユリウスが生まれた時にはすでにマリウスと婚約していたため、彼女にとってもユリウスは我が子も同然の扱いだった。

この王太子夫妻には実子が四人居たが、甥っ子姪っ子たちもユリウスによく懐いている。

今は全員学舎へ行っている時間のため、室内はいつもよりはしずかであった。

「同じ王城内で暮らしているというのに、おまえときたらなかなか寄り付かないからなあ」

「そうですね。いつでも遊びに来てと言っているのに。まさか私たちのことが嫌いなんじゃないでしょうね」

「そんなわけじゃないでしょう。兄上のこともアマル殿のことも大好きですよ」

ユリウスがニツコリと微笑むと、両手を組み合わせたアマリーエがうっとり目を細めた。

「それで兄上、話というのは」

ユリウスは改まってマリウスへ尋ねた。

「口実だ口実。拾った子どもの世話ばかりしてまったく寄り付かない弟を呼び出すための口実だ」半眼になって兄を睨むと、マリウスはカラリと笑う。

「というのは冗談だ」

「あら、半分は本当でしょう？ ユーリが来ないユーリが来ないって毎日嘆いていたじゃない」

面白がった兄嫁が少女のようにうふふと揶揄するが、王族の公的行事やら何やらで、兄とは二日に一度は必ず顔を合わせている。いったいどこに寂しがる要素があるのか謎だ。

「可愛い弟がどこの馬の骨とも知れない子どもに盗られてしまったのだ。嘆きたくなるだろう」

「兄上。馬の骨じゃありません。僕のオメガです」

「うむ。オメガは馬の骨じゃない。国の至宝だ」

うんうんと幾度も頷きながら、マリウスは傍らの妻の肩を抱き寄せた。

「薬師から、おまえの拾った子どもは鑑別の結果、確かにオメガであったと報告を受けている。ならば王国はこれを保護する義務がある。存分に世話をするといい」

サーリーク王国では、遙か昔よりオメガとは尊ぶべきものだという、国民共通の認識がある。

それは王国を開いた祖が、たった一人のオメガを伴侶としたアルファだったからであろう。

サーリーク王国に限らず、大陸全土の比率を見ても、ベータがもつとも多く、アルファは少ない。そのアルファよりもオメガは稀少だ。

異国ではオメガを奴隷のように扱い、劣悪な環境を強いることもあると聞くが、ユリウスたちサーリーク王国のアルファたちからしてみれば考えられぬことだった。

「僕が僕のオメガの世話するのは当然です。なので、早く戻りたいのです」

「ははっ。おまえもアルファらしくなったな。どれ、俺もおまえのオメガを拝みに」

「ダメです。減ります。つがいになるまでは他のアルファには会わせないと決めてますから」

ユリウスがピシャリと兄を拒絶すると、マリウスとアマーリエが顔を見合わせ、二人揃ってぐふふとおかしな笑みを浮かべた。

「いいわ。可愛いわ。ユーリが独占欲を見せるの、尊いわ」

「まさかおまえに威嚇される時がくるとは！ 感動だな！」

頬を寄せ合って仲良く囁き合う王太子夫妻に、ユリウスはげんなりと息を吐く。

「兄上、それで話は」

「おお、そうだった。おまえが子どもを拾った時の様子を、もう一度詳しく教えてくれ」

マリウスがようやく表情を引き締め、貫禄のある王太子として口を開いた。

ようやくの本題にユリウスも真顔になり、二年前の騎士団の任務を思い出しながら、当時のことを話し始めた。

サーリーク王国の北側に広がる山々は、のこぎり山脈と呼ばれている。雲を突いて連なる稜線のこぎりの刃ように見えるからである。

ユリウスが子どもを見つけた時……つまり、約二年前、このゼーゲ山脈の向こうから難民が流入してくるという椿事が発生していた。

山からだけではない。南の海からも人間をぎゅうぎゅうに詰め込んだ漁船が流れ着いたりもした。しかし、そのほとんどは死体であった。船内の衛生環境が悪かったことに加え、乗船していた人々の栄養状態がそもそも悪く、健康体でなかったことが原因と思われた。

この難民問題はサーリーク王国に隣接する周辺諸国でも起こっていた。

そこで各国が協力し、この難民がどこから流れてくるのかを探った。

ほどなくしてそれは、山岳地帯に位置する小国、デアモントからであることが判明した。

このデアモントは、正確には国という扱いではない。どこからか流れ着いて、山間や高地に居住地をつくり、いつの間にか住み着いていた者たちが、いつからかデアモントを名乗り始めたのだ。

デアモントの詳細については、どの国も情報は乏しい。

デアモントは国交を拒絶しており、輸出入も行わず、徹底的な鎖国を貫いているからだ。

しかし亡命者が居ないわけではない。

ごくごく稀にはあったが、デアモントから逃げてきた者が保護を求めることもあり、その者たちからの聞き取りで得た情報が、今回の難民騒動で初めて各国の間で共有された。

収集した情報を突き合わせ、分析した結果、デアモントで暮らす民の数はおよそ数十万、言語は大陸公用語、農耕と酪農を主とした非武装集団で、独自の信仰を持っている、ということがわかった。そして山越えを果たした難民たちの証言では、今現在民たちはひどい飢餓状態を強いられ、強制労働をさせられている、ということであった。

耐え切れずに逃げ出したが途中で追っ手に殺された者も居た、命からがら集落を抜けても、山で獣に襲われ、崖を踏み外して死んだ者も居た、乗れるだけ民を乗せて出港したが途中で難破し沈んだ船もある。

多くの者が命を落したが、それよりもなお多くの民が今もまだデアモントで苦しんでいる。

どうか、誰か、彼らを解放してほしい。

飢えと、労働と、信仰から。どうか解放してほしい。

涙ながらの亡命者の言葉は、各国の首脳陣を動かすに至った。

各国はデアモントの実情を把握するため、それぞれが査察団を編成した。

サーリーク王国からは第一騎士団が派遣されることとなった。

そこに新人騎士としてユリウスも名を連ねた、というわけである。

騎士団一行は、ゼーゲ山脈の中でも、難民が通ってきたというルートを数か所特定し、各師団に別れて生存者や新たな亡命者が居ないかを探りながら移動した。

デアモントの集落が近づくにつれ、山中には放置された遺体がそこかしこで発見された。

手厚く弔うには数が多すぎた。そのため進行の足がにぶる。予定の行程には届いていなかったが、第二王子である団長の判断で、その日は山中に天幕を張り一夜を明かすこととなった。

周囲にデアモントの民が潜んでいないか、それが亡命者ならば保護を、敵対するようであれば捕縛を命じられ、他の団員とともに斥候に出たユリウスが見つけたのが、死にかけの子ども……つまり、ユリウスのオメガだった、という経緯である。

抱き上げた瞬間に感じた衝撃は、今も鮮明だ。

当時の感情を思い出して早口に語ったユリウスが、息継ぎのためにふうとひと息を入れたタイミングで、長兄が質問を挟んできた。

「その子どもが居た場所に、他に誰も居なかったか？」

「居ません。居たら気づくでしょう」

「オメガに夢中のおまえにその余裕があったならな」

「僕になくても、ロンバードが居ましたから」

ユリウスの返事に、ふむ、とマリウスが頷く。弟可愛さに騎士団長の右腕からユリウスの側近へと『転職』させられたロンバードの能力は、長兄も認めるところである。

「おまえの話は、子どもの愛らしさについて以外はクラウスとほぼ同じだな」

目新しいことはない、と顎をさすりながらマリウスが呟いた。

結局、二年前に派遣した騎士団ができたことは、山中の遺体の埋葬のみで、生きている亡命者の保護には至らなかった。

デアモントの集落に入ることも叶わなかった。

サーリーク王国だけでなく、他の諸国もそれは同様であった。

デアモントがことさら堅牢だというわけではない。

事前の情報通り、民たちは武装していなかった。集落の周囲は大人の背丈ほどの石壁が築かれ、人の出入りが厳重に監視されていたが、そこに立つ見張りですら武装と呼べるほどの装備はしていなかった。相手が非戦闘員である以上、こちらも武力で押し通るわけにはいかない。

サーリーク王国騎士団や他の諸国は改めて使者を立て、代表者との対話を要求したが、それは受け入れられなかった。

以降二年にわたり幾度も説得が続けているが、デアモント側はのりくらりと逃げ続けている。デアモントから流れてくる難民の数は、ここしばらくは減少の一途を辿っていた。国政（国ではないが便宜上）が安定したのか、との意見もあったが、生き永らえた亡命者たちは口を揃えてこう訴えた。「あそこからは逃げられないようになっていく」と。

「理解不能ですね」

ユリウスは肩を竦め、小さく鼻を鳴らした。

「聞けば見張りには武装もしていない単なる平民とのことではないですか。我々が押し入るのが難しいからといって、内側から出てくるのは容易でしょうに」

「それができないからくりがあるんだ。デアモントの民は、信仰を盾にとられている」

「……信仰？」

「もともとデアモントは国じゃない。デアモント教という宗教団体だ」

デアモントからの亡命者は各国で保護されているが、身の安全を保障する代わりに、デアモントに関する情報を開示しなければならない。

捕虜ではなく客人扱いとなっているため、無理な聴取は行われていないが、彼らはデアモントに残された民たちを救うことができるならばと知っていることは積極的に語ってくれた。

しかし事がデアモント教内部に及ぶと、途端に口が重くなる。

教皇と呼ばれる人物を中心に教団を築き、古より月神デアモントを祀っている、という程度のことしか語らない。おのれらの味わった苦境は語れど、その根幹であるはずの教団については皆一様に口を閉ざすのだ。

「一種の洗脳だな。信仰心を利用して、生かさず殺さず、民たちを操ってるんだろう」

長兄はふむと顎をさすった。

「しかし亡命者はおのれの意思で逃げたのでしょうか。ならばその洗脳とやらも解けているのではないですか」

ユリウスの指摘に、マリウスが軽く肩を竦めた。

「それがそう簡単ではないらしい。神は崇めど唯一教でない我々には想像もつかない話だがな」
妻の淹れた紅茶で唇を湿らせ、マリウスはひと息ついた。そしてユリウスの方へと身を乗り出し、低い声で切り出す。

「ここからがおまえを呼んだ本題だ」

ユリウスは背筋を伸ばし、兄を真正面から見つめた。

「デアモントの民は公用語を使う。現に、俺たちが保護した難民たちもそうだった」

「はい」

「しかし先日、他国よりとある情報が寄せられた。デアモント教団についての、貴重な証言だ」

「はい」

「教団内部のごく限られた者たちの間では、『そこでは使われていない言語』があったようだ、と」
ユリウスは目を見開いた。

「ユーリ。おまえが拾った子どもは、どの国のものとも知れぬ言葉を話したと聞いている。恐らくは、今は使われていない古語の類だろうと、薬師は言っていた」

マリウスがゆっくりと口を開き、一つの可能性をユリウスへと示した。

「おまえのオメガは、教団中枢の関係者かもしれんぞ」